

中学生 優秀賞

十万回分の「ありがとう」

大阪教育大学附属平野中学校

一年 渡部 早稀

これは、私が小学二年生の、夏休みころの話です。

私は、毎日のように近くの公園に、遊びに行っていました。ドッジボールをしていたとき、ボールが遠くまでいったので、ボールの近くにいた女の子に、「ボールとってくれない？」と言いました。しかし、その子は何もないかのように、無視されました。結局ボールは自分でとりましたが、私はあの女の子が気になりました。

そして、次の日も、その次の日も、あの女の子はいました。私はもう一度、女の子に話しかけました。「なにしてるの？」すると、女の子は私から逃げるようにその場を立ちさりました。

一週間後また話しかけました。女の子は、

やつと声を出してくれました。しかし、その言葉が、「私、難聴なんだ。」でした。私は難聴という意味がわかりませんでした。帰ってからお母さんにきくと、「耳が聞こえない病気”でした。私はそんな人がいることを初めて知りました。お母さんに今までのことを話すと、「じゃあその子と話すときは口を大きくあけながらゆっくり話したらいいよ」と言われ、早速やってみました。女の子はメモ用紙と鉛筆を出して「ありがとう。」と書きました。女の子はいわゆる一人ぼっちで、障がいの子で友達がいなかったそうです。そんなときに話してくれたのが私で、初めはどうせまたすぐいなくなると思っていたけど、何回も話しかけてくれて仲良くなりたかった。思ったそうです。それを聞いたとき、私はすごくうれしくて、その日女の子とたくさん話しました。それから一週間に一回会う約束をして、その分私は宿題もはかどりました。

私は少し手話を覚えて、早速女の子に見せ

ました。名前しか私はできなかつたので、女の子が返してくれた手話はよく分かりませんでした。

夏休みが終わると、きつともう忙しくて会えないとお互い思っていたので、夏休みの最終日に最後に会うことにしました。その日はいつも通り楽しく話しました。夕方になつたころ、別れる時間になりました。「また会えるといいね。」「会えるよ、また。」と言っているのは少し照れくさかつたです。そして最後に女の子はまた私に「ありがとう。」と言ってくれました。だから私も、女の子があのとき返してくれたときの手話を返しました。

手話をした日、家に帰って女の子がしてくれた手話を調べてみました。それは「ありがとう。」でした。あの女の子とは、あれから会えていません。人見知りの私が、なぜあんなに話せたか、私は覚えてないけれどあの女の子と会えてよかつたと、今も思っています。

耳が聞こえない分、女の子のありがとうには  
十万回分の、「ありがとう。」を感じました。